

日本医師会インターネット生涯教育協力講座<アトピー性皮膚炎における外用療法の実際>

## アトピー性皮膚炎治療の現状 - 3

ステロイド外用薬の使い方

● 総監修 ●

東京逋信病院皮膚科

江藤 隆史

## ステロイド外用薬の使い方

- ◆アトピー性皮膚炎の治療は外用薬が中心となる。
- ◆ステロイド外用薬やタクロリムス軟膏による炎症制御と、保湿剤によるスキンケアを並行して進めるが、最も重要なのはステロイドの外用である。

### 【1】ステロイド外用薬の概要

#### ○ステロイド外用薬とは

- ステロイドの抗炎症作用が明らかにされたのは1948年で、関節リウマチ患者に使用され、劇的な臨床効果が報告された。
- ステロイドはT細胞のレセプターに結合し、核内に移行、ステロイド反応性の遺伝子を活性化させて薬理作用を発揮する。
- アトピー性皮膚炎においても、軟膏を中心に約50年の歴史を持ち、現在も外用療法の中心的薬剤として広く使われている。

○ステロイド外用薬の分類

- ステロイド外用薬は、その強さによりストロングストからウィークまで、5段階に分類される。
- ステロイド外用薬の効果の高さと局所性の副作用の起こりやすさは一般的には平行することから、必要以上に強いステロイド外用薬を選択することはない。
- ▶「個々の皮疹の重症度」に見合ったランクの薬剤を選択することが重要である。

ステロイド外用薬の分類		
薬効	一般名	代表的な製品名
I群 ストロングスト	クロベタゾールプロピオン酸エステル ジフロラゾン酢酸エステル	デルモベート ジフラル、ダイアコート
II群 ベリーストロング	モメタゾンフランカルボン酸エステル ベタメタゾン酪酸エステルプロピオン酸エステル フルオシノニド ベタメタゾンジプロピオン酸エステル ジフルプレドナート アムシノニド ジフルコルトロン吉草酸エステル 酪酸プロピオン酸ヒドロコルチゾン	フルメタ アンテベート トプシム、シマロン リンデロンDP マイザー ビスターム ネリゾナ、テクスメテン バンデル
III群 ストロング	デプロドンプロピオン酸エステル デキサメタゾンプロピオン酸エステル デキサメタゾン吉草酸エステル ハルシノニド ベタメタゾン吉草酸エステル ベクロメタゾンプロピオン酸エステル	エクラー メサデルム ポアラ、ザルックス アドコルチン リンデロンV、ベトネベート プロパデルム
IV群 マイルド	フルオシノロンアセトニド プレドニゾン吉草酸エステル酢酸エステル トリアムシノロンアセトニド アルクロメタゾンプロピオン酸エステル クロベタゾン酪酸エステル ヒドロコルチゾン酪酸エステル	フルコート リドメックス レダコート、ケナコルトA アルメタ キンダベート ロコイド
V群 ウィーク	プレドニゾン	プレドニゾン

(厚生労働科学研究「アトピー性皮膚炎治療ガイドライン2008」より引用、改変)

## 【2】ステロイド外用薬の使用法

### ○使用法の目安

- 下図はアトピー性皮膚炎でのステロイド外用薬の使用法の大まかな目安を示したものである。
- 重症度に応じたランクのステロイド外用薬を使用するが、十分な効果が認められない場合はステップアップ、十分な効果が認められた場合はステップダウンする。
- 使用部位、年齢に応じたステロイド外用薬を選択する必要がある。



### ○使用量の目安

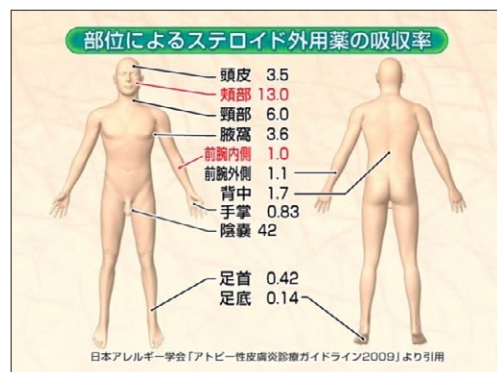
- ステロイド外用薬の使用量の目安としては、成人の人差し指の先から第1関節に乗る量「フィンガーチップ・ユニット (FTU)」が提唱されている。
- 1FTUは約0.5gに相当し、手のひら2枚に塗る適量とされる。
- 手のひら2枚は、成人の顔全体の面積に相当する。



「フィンガーチップ・ユニット」は、ステロイド外用薬の使用量の分かりやすい目安であり、その普及が望まれる。

### ○ステロイド外用薬の吸収率

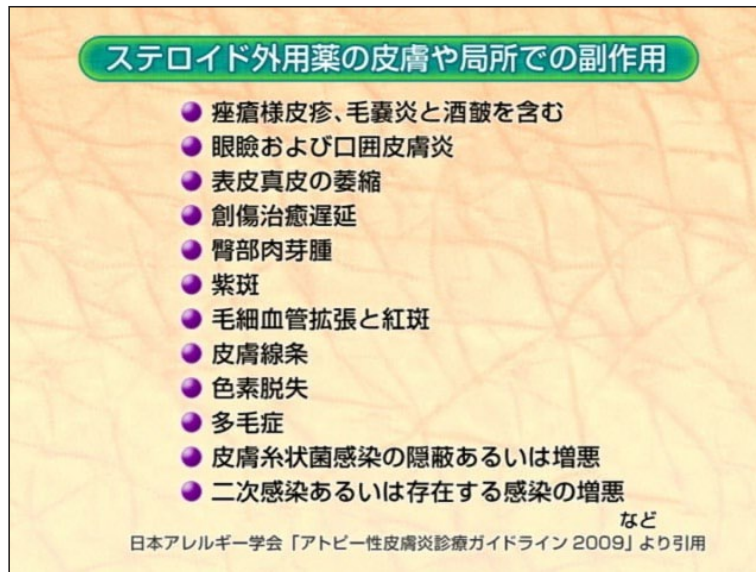
- ステロイド外用薬の吸収率は体の部位によって大きく異なるため、FTUで外用薬を使用する際にも十分な注意が必要である。
- 右図は前腕内側を1として、主な部位での吸収率の違いを示したものであるが、顔面では13倍も高くなっている。
- 小児や老人など皮膚バリア機能の低下のある皮膚や、発汗量の多い夏などは、吸収率が増加するので注意が必要である。





### ○ステロイド外用薬の副作用

- ステロイド外用薬の皮膚や局所での副作用として、右図のようなものがあげられる。
- 吸収率の高い部位への使用や、高用量での使用、その継続により、副作用は起こりやすくなる。
- 適切な外用では、副腎不全、糖尿病、満月様顔貌といったステロイド内服による全身的副作用は起こらない。



### ○まとめ

ステロイド外用療法では、部位による吸収率の違いや副作用に注意しながら、フィンガーチップ・ユニットを目安に、十分な量が用いられるべきである。